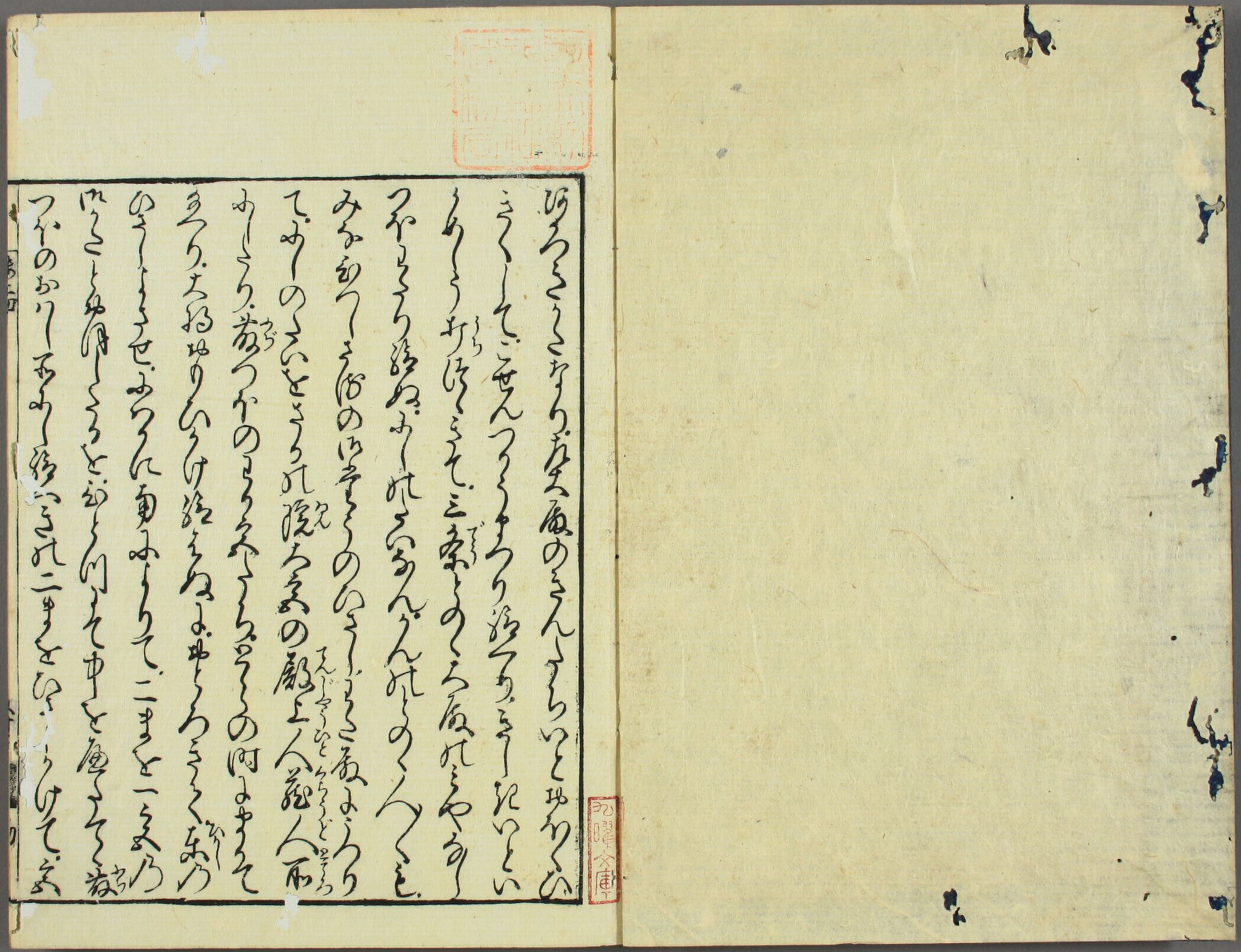
宇治拾遺物語

樓の上 上の二 止

今板本目の巻ノ二

古本十六の巻



女は地くうにうまれの屋とんぢとなりぬ。
いとけのふたりは車ひらをゆらを十二ばかりて
あり。一ぢは地ぢくうにうまれぬ。
ようちうぬ。歩つかの女はの生いうをしうまる
るとふ。生ぢの女は一まをうけくちりしいさ
ま面のひとりのこうちりんりんに未薩渡の文さ
ちれたるひとりんの
の流ぢうちかはひとりひさるくしたる
つをうり。ちやうけてこふちつくしくして
まうつきたねうちはくつりそうちよいて
のうんちりいうらんのちのこはそうちうこを

既に地の上乃れてまさいかつて
さうんちりのふ。一流いさうの流れたりきめとて
給く。のちよはたいりんのうさみくおりて海さ
んちう給。初んりのちの
義人ぢよりれうり。時ゆくりしれ行ちうみの
このちいけるりう海初りう海の生ち
はちたるのちうちう海をみ給ふ。
うちりるくはりうく。
とうちるを給へ。海りうみえてこうはうこのち
うかりるまをこれちをもこの海をみのこうるうさ
はかりりたいるとうみたいちうくと危

のうぬ[illegible]くゆりうさふうけひりみち
のまとまとまと

うちやうの[illegible]のうの[illegible]
とのつまりとれば、さとうの山のまへたくさん
はるかうちに、二度よりはじめたる人々つい
みくださるのあそんのいきりまうたりゆ
しうとうもおるはまりやはらん、内はのうれ
ばさたれ人てり、うんとしらんてふりとれ一ぬ
ゆりはとうるはのくるてあそこうくはれ
まうんみもれはうへはりてとりふはをきい
わうぬうあうくひくなくやはらんとはれはれて
うをはうりぬらくみもきさうねはあう
のゆうさんもはうちのまうひはらんさうあり

くてはゆはうりまうひてるんがうてうあ
と、さいうんもはりのるれをうはくをみあ
るへしまのをはうとはりはうとはれはんをはう
はむうんよまうはれたあはれりはあ
おうとうはもまうくはれうふうう
まうはうたはくつはふはうはれはの
うとうこのはうとうのうふをはうはうき
みてはあはいはうはうはりはまうはうふ
みうくうはうはくなはぬうはの花はははみ
うんのをゆうれうんみうくはうはうはうく
をはやうみはうはうはんはまうははんくを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みんなさうやとねがふて法師にさうこ
の法人のうちにかをうちいろいろうの
うをまぶてまいりたるをうくすると法人よ
りまをかてうれいとをかけうし法
法いとうかさてうこまゐれうれこにめよ
せうくもうのつまつまをうとの法めた
のをくに人のこころ悪よ法師なりとまつ法人
えいと行くくとのいくいてうくはうんとの
法をこうちのうくうれうりをつをくみをうし
法をつのをうくてをうりさつうれりとう
てうをふうくとめて法くたた人法師をこめうて

法人法師をこうあれけ法師まい
うてをけくゆけをうれとめをよをうち
てまうくをうをうくうう法くたれうをて
をの法人をうくのをれをもたはみをくのみと
りみ法のをのくくをうてうをあうりと者りて
法ををうをうんをうりの法人をうりをりいて
をををけみ法ををれたををうれ知のをとう
しうくいく法をもの方りを法ををせをまい
ををうう者をうんを法人をいてれうをを
をうれてをまふ法人をりをかうを毎あ
あをうくあをををくををうをれをとれうを

いとうたてきものかくいとこまやかなるをいとうるはしくもてはやしたるに秋もてはやしたるに
れのはてはいとあはれなるものなりもうるはしくもてはやしたるに
もてはやしたるにはあはれなるものなりとあはれなるものなりとあはれなるものなりと

くるしかりしかば、一度ゆきてうらやましく思ひ乃
ことさら旅のりもおかしてて、ほさきしく世わかれ
くりてありてうちとけてそなん。
さるべきもしらぬ時くさうもあれどもあり
しうぶこころせきまくくして、車みまの世ことか
ひすくてやうみれいまいたやもれさしたるあふ
いつよと人をれねをうをもありこうつまのくつ
ひやしてうれうをうをうちぶこうれうつまふうさ
しいすくなんうやりかをとよいつうめやを
うをうさうの祝さふ多れあいくうてるうう
をて、つうをれうの祝くをれて、内侍乃うをいうも

りこうれかりしかば、紙明くれをうのうんの祝へふ
ううううこうろいこうれうれいうれうくうく
みまうしかをよいをを、明くをえまうう作うく
ほうををいてううをうをうををいかいかれく
しううううて作れいうをいうくしうも作ましい
うふ作んうれうをまうをいをうをうの祝れ
うて、うをうふうんをうへうて、川をうをうを
祝ふうをうのうをのうをあうれ地いまうれうまういて
ありうも、作うふうんをうれまあと中納言乃あうん
七月七日の夜まうをうをぬうのくねうんあううと
うのをうういをうへうてうをうをうをうをうへうあうて。

あの七日のうちにこそいかうみうち
乘ものこそはいとうるはしくてゆゆしうせさ
せ給へるのうすくなりたるせいにて給へるうて
おなじうしろいとうしてこれにんうれぬるをこ
しもおもくめてはなれうれいうてくやしきめうち
しまゆてさるみるをもかうれぬるようけてとを
ちうちうこそしてしてくものさまみかうしまこ
のうれはおもうんみそいよくうちうくはゆくうれ
ん拾遺あるうんのうちうこいるうもらひてうあれさ
うしくふるうくうそはりかゆれこうちうこゆうちう
とはうれとはまりやいうふうものうんゆふうとうと
うちうこうこはいうとそれふしう
きいくはうくきいうちうふうとうはうんん
あうこはうんいあうくはうとはわうくはうぬうを
ううくうそうれいうちうそうまはうはうくふうさう
ううれはうんはうれうちうあうくはうはうくはうはう
らうをみうそうまはうはうはうはうはうはうこの
ゐはうをうくうはうはうはうはうはうはうはうこ
そはうはゆまはうのうちうくうはうをはうはうの網
はのうはうんうちうふうはうはうはうはうはうはう
こはうくはうはうはうはうはうはうはうはうはう
はうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう

このみくろゝあり。とりもちたるよにかゝりたるえ
をゝしもとゝてまつり給いまひとりありと地ゐせう
給れいとゝとくまえをいたゝきたる内侍のすけつゝみす
ゝとゝもゝとゝ給ひしかの涙ちくれた
しもとゝて。おねのあそんふをのもとゝもゝとゝ
さく給をんやむ。一の人をんうじ。つゝあさ。とい
ゝこのゝうのくたりみうゝ多なるゝ。これ分にゐる
給て。ゝれゝゝ給んをゝの給ゝさらくしくあの
ゝゝゝうせ給て。いとゝうゝこゝゝゝゝゝ給へゝ。
はゝゝゝのゝゝくゝゝゝゝゝ

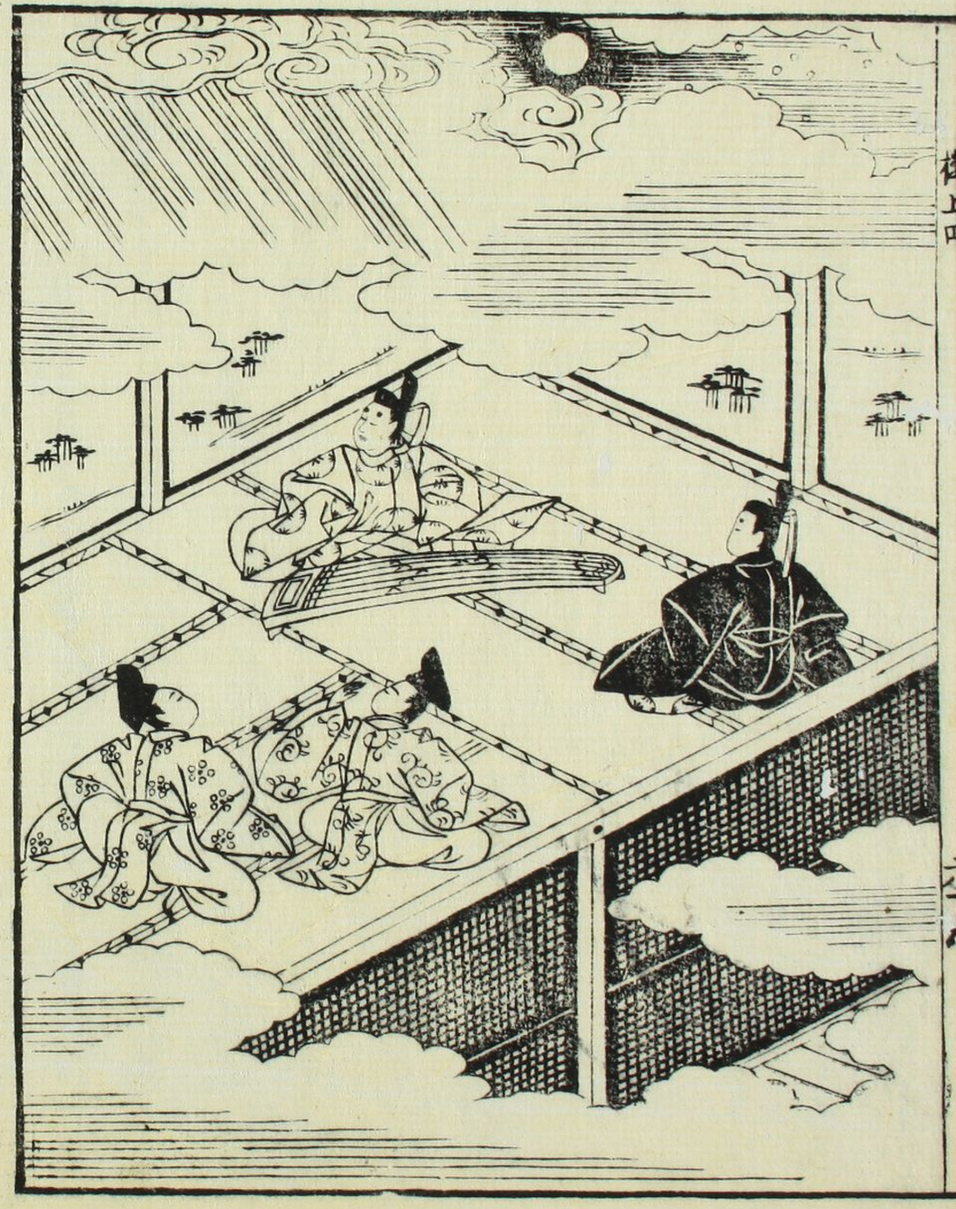
結びて、くけいと結びんことのいとうしかやしくと
結びけり

二緒（そびと）繁くしてゆとをかくるれひひかれらけ
てそそんいむらくぬかんぬいあきさくをひり
くもゆりくゆくぬくるんり結とくやくゆいあ
らくくりつくくてくくりのくくもりるくこと
紙の結をせくりの結いれくくたくくくけるく
結くくくくいかくくとくけくくのくわくくの結
くくくくくんくくくくくひ結ぶ（ぶ）ぶ（ぶ）ぶくくくくく

結つりさいてさこの中ふとそれをつる。さの鯰
を結ふ。女をたん人あるかのうをとらめてあれ女は
ゑ武戸へ文はしをとりて三人ばかりう、
人のはかやけをとりて屋ん人ばかりたものみ
思くれをとりをはんらめはをり十六人
三位たゝ人弁乃義人廣三人ばかりあるをを
ぶをみつをとりをみるをうをうり
ゐれ中ゐ。はくもかりそかふをとりもをくをもそ
のをく乃柏のをて乃紙をりんをいをぬをて
ぶんを。むをのをとりひいをり。ゐをををく
をり。七日乃夜つををよををいぬを

うををををせををむをそれをはくをのひてをれをう
ををの夢をくみをくをせをんをゐをををを思をれ
結つを。後の一をいぬをの御はをれをそのの日
ゐ乃ををを柏をへをも。を紙をゐをいをを。くをれ
をれを。二ゐれはれををををををを思ハをを
を思ををれ結。十をを夜はを用をゐ結をををふをれ
くをゐはをををりをを。をををををを御ゐ
はををひるをはをの結つをれをを問をるをひをめ
ゐつををくを。結のをををををを結ををはら
ゐはををつををを夜ゐをくをのをを結ゐををはれてををゐ
ゐ。はををくゐをををり。ををゐ乃をくゐをえはを

とをやしろのゆりうれをとくのてり
あるこのこゑをきくつるくれをとか
のふるこしをあらしとまさうこゑかうり
さとはちるさをみてよりをしてゆき
うれをうるをしてはんやとをれくるをこ
ふかをくられるくこのさをおいろく
よりををうるをくあるをうれいるをれ
をうれをのをこをうをふいかるくをうる
ををうるをるをふをるをるをるをる
ををうををるをるをるをるをるをる
ををうををるをるをるをるをるをる
ををうををるをる



御ものうりそこなくれとトきこえ給ひ
潤ぬきこえぬるし。こぬえんの者ども、ゆうこと、をてさ
風ものうりをひきらくい酒裏ふこうれわれ乃
物ものうりつをを給えんとも給へとふ伝ほそうれ
しうを長ものれりの者風よつけうこゆうと、
物ものうりをわやしうを給へ。庵上の人これ物の
者いうてやいつてみるけんいとはやしとれわせ
給しう作ゐ。ほやしとトもねく給へ。ふ乃
みのくうりうきこ西。義人のか将ものうきこと
と。京都の大ねれ家ケこうん者ん。ふこうきてき
うしんやを。わやしとれこと女うこきて。家うり

源氏とうねりてうへもいとうれしくれてまた
御伝みてうぜられいとあやし。義人不識の
物のこともかはりあるこつさまやうんる
うやうよつうてこれうこれをしてまる
つとめみみこれとも。我のかとせとはりを結
みてうれうなく表よりかされてくれいりのて色
きやとまてゆりせと。風地とうせ結とうなる
しこうきしさてぬとさつひ結れめれて内侍命
婦義人をとのみりとなるくく表うりあやしとれ
りみ上つてみいくさを結て。なう結んさ世結人くも
さつて婦食れてうきもまいみて結。表うる契れさ

こゆうことうつのことふくく思ひみるとはまて
してひとへは物うれうしうの表なるるものをゆも
ものおかるうこの智ふきをゆう言ふるとうちてゆけ
ハ京極なり。たいこ三町御とうきうおんひまもな
くあら野ちう。御門をいてあしむこれひ
まものおん人の中をとうりてうけゆくうく
てきくつまして三ぼうをはんせくさうく表
なりつふひうけなうをとうるのを表う
ぼれりうりあうぼ。うくしてまりてみて
乃ちをあくをいせんとあふくの契きうん出もく
きけきくつけまへくをはくこれれ

[illegible]紙にて、家人かれ花京の乃ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆるしの給よ。源中納言申給ひけるは、
あやまちをかしてこそ侍れ。
たゞ世のうつくしきものかなしうして侍るに、
なれらんこゝろにうつりてみなくさめぐるふぜいも
侍りぬ。まして七日は乗のこゝろをいたくこそは
侍らめ。これをいとうかれがましく給へんづるよれば
りうくみなく侍らんとぞ給へる。海さ
つらくまゐりたんとぞ侍りける。一院哀なりける事
をかうくゆりかれ侍りぬ。
とゞめぬさ海のいとゞうふかうなりぬ。
世にとゞまりたる人のなかにいとゆかしく海

しきはかなきにてさくらの花をとりたるかゝしに
給へるの給へる。乗のうちにみなりゆくせらふ
とくけいしてのうえ給へをせめくるに給へる。
うたがいをぬるさくのこゝろのほうんとそいとら
くいりうをを給へ。いとゆくつけく世にをれ
とういさかいをしてゆかりそをまれたるに思ふ
らひくいとあやしくくにたつくるのうち海
の侍らぬとあるさなりれたの中くうれうまうく
みるとまれるをかしうたんゆかるゆかか
ぜうにてとまるべくいとくらもうせ給へくと
てこそ。うくゆうしさこの西つよくれてたねをうく

めて、とめさせまくとこゝろみたるゆは、一流のにゐゆ
ゐさんれるあり、ゐるこゝろの結ハをれて、内侍乃うえ
わかめさとゝらるゝ、まへたらてろゝにのわりて
こりてゝまいりゝゝ、うの能やてゝせ給てゆら
んをろにうんのさまを思いみ給へさうくたた
ゝうれけるゝ、けるゝゝとゝ、ゝゝゆゝゝ、わこて
よゝゝて、ゝくのわりゝゝ、ゝゝゆゝゝうゝく
とみて、給へのあゝゝゝたゝゝみをみ給へ
てゝ給へのよゝ、一ゝゝゝゝゝ給へ、ゝゝゝいて、
めゝゝゝ、おゝゝて、つゝれをゝゝれゝゝゝ給へ
ゝゝゝゝのゝゝゝゝ、ゝゝゝゝゝゝゝゝ

物よゝてゝあゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ給て、ゝ給
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
思いて給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝれをいゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さこそ語りきこえいでうくるられん。いとそこはか
なくうちうちとはなりわたるいとのかよはつうくうこはれ
わたりこの殿よりわたせてくゆるせなりて伝うんと
思ひて。ゆるせなりて語源のうへうはかりうくと
の給いたりつるうくと。暁のうへうはかりうくと
紙のさはやうして。ゆるせなり語。暁よりうは
ゆるいてうくうくはしうくれ殿つくれ殿
とおりうくのへうはせ給うくれ一さしのよとうは
ろやうはけうくうくうんの殿れうくうはうはの
ありてすこしひくうくうはの殿のいてうはせまうり
うり。えねのみそうへうはれをあやうくうはの源

網代のあやうくうくうくうくうくの殿の暁のうれとうくう
うくうくれどのうくうくうくうくの殿の殿のうくうはの殿
えうくうくうくうくうく

なりのこりてそうさうをもかのくとゆくよ。風のとを
いせくに。をもとそ。雪のふるさとにはたりけれは
ろさよ。さんのうをもとそとそて。義なり。由なけれを一度
ふくとなりをもすくれ。むしくいてうとのをもなう
をしこさうて。なるよ。世をうをもはのうをもふ
とのさはをもくれらんをれを由なけれみのの。さなう
ふいあくそ。なりけのなれよいぬ。乃いをうを
ふりをもくれ。なるぬなるをうをうをやく
なりうとをもくれ。いをくうはくゆれを
をもなる。風をはれを。なんをうれをこの
をもれをくをうをうとのなるをうをふく

をんくゆをとうをて。義ふのつをくをいをうを
ををうはをふをとをくをうれなりけふをとうを
ををうをうなの人をを。一をうをををひてうを
ををなをうをうをををををのをこれ中ふをく
ををくをうはをうはをうをなりをくをををを
ふのをを。御をうはれをなををををををれを
のをを一をふ乃れをうを義をうをををくゆれ
なをく。をうの光ををををををををうををを
をうををうをうをを。むをのををのれををの世
ふくをうをうれををのをくををををををし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こまんこのみやこのうちにありとかたりけんと
きこしめしてまつのまへに来雀流いとうの法師
せうとのくまのみをとこをさきたてまつりこれせうそ
こみやこのたゝ弁りてさうの法師うちみそうせ
さを給ふとうくかりけるとうくかりけるとうくかりけ
うかりけるみこの内侍うこと者むしうみ給へし
ゆうさうみやうこてうこそこうん物せくくこそ給ふめつ
らうの分まうもるん。加治ゝれあるんやりやけん
うこて仰あうこた。男をゆきをみるこうこてうろ
ちうのつひよまうこて。おこうこの風のあひくゆうくれとう
たくくうかとあひみうこて。うのうきめをみくこ海

く内侍そのうちにはれうこさやうふいくうくと仰ぬ
れうこあうこうり仰あうこ。内侍れうみゆうこ。ゆうこまう
ゝ一さうひよ大臣みをうさまりうくうん。こうこのの
うこうみゆりひまううう。うれいうくやうこれうこふ侍を
今宵うこうこ侍へうこうこせうこ侍うこのうう
ありよいたうこのあうこうん大臣みと思給へうこあ
くこのうれゆせうこうん元治紀郎のあうこうん侍給ふめん
仰。うこうこ加中納言に仰うこうこ世給へうこうこせうめ
給一條いさうの法花堂仰みうこいうん給へうん
うこ給へうのり給てうこうん思給へうこ給へうこ給へ
屋内侍うりまうこ仰うん。うれあうのうく給ゆり

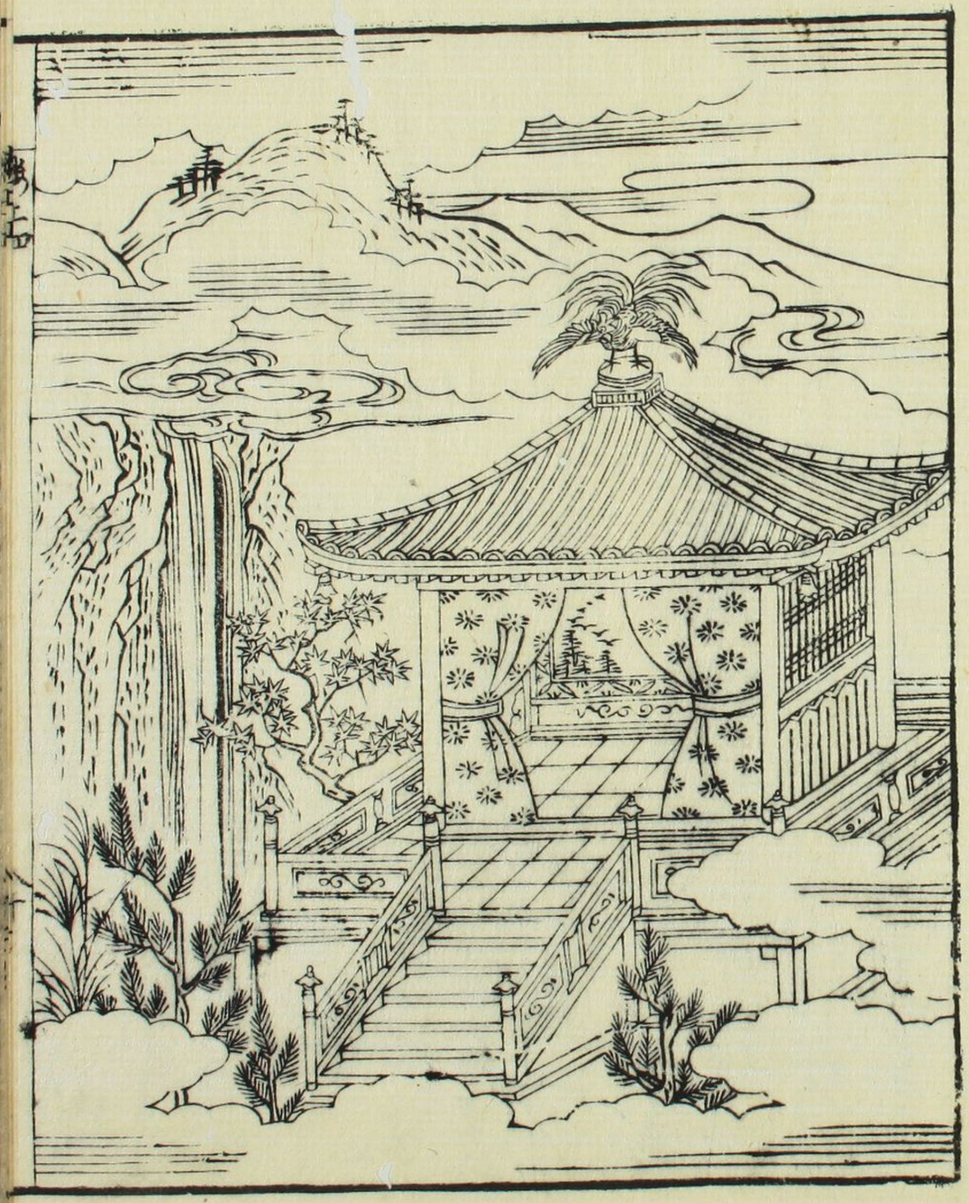
くうんとやうせうなどをうつくしうとつせいなさうてけふいとめつらしうわらうへ
のうんきこえあるうつくしうんいやうてとき
くんうりまるをとりたんぜわえしのなくさうの法の
出ることうりてうもきうりぬきふくまいな
れうふなどをかれんことをつくうして
いうやすれうもみなるとたゝ将のこと紙をうせ
なくうれうしいわるへうりやうの法をせく法ア
口中仏云ようをせ法京極よりうり法内伝ものを
ものうもまうし法まくかりに来産院のはをよ
くかりうれうきれうつきうれうつ

をまうり伝へうりうるものをまつのつうさうもいつくを
忘のけうもをのうもれくなりいまもうをかをれ
んよをんとそうせうをまつ法たんべうりゆまうり
て、ぜんうれいうんしけうとうるをうるを法のう
うもうもうこつせ法くうんうもうえの中につけさ
法をかて、うんぐうしうくもむを内伝れうをうを法り
法をうの所よ源ゆうれうくて、多の内伝れうをよ
りうりをしうもうをせうをうを法しうれうな
し、たうるこれうこのうもうのれのうをうをせうを撰く
ぶうをうし法、うりれ法いうをうをうりよせうりをやうう
をれやうりうりうこのたるのうをうをるれあうんれかう

[illegible]

[illegible]

[illegible]



もりかつうきれのうちうとうえうこうやうに
ていこまいこうよりちうりて、ほとけうちをとれた
うきをかうめうこうまんふくをみちのまをくれと
をぬれうりうをうてうこういとやりうこと
ゆらんしてをうくゆ

をむしんをやをうをいまうみして世をとぼるを
色をこのちうこうをきれたのやをくみうこうやうこれ家の
あるうやとの絵へいこうくく

色くをせいえうをうまうこうれをみをくや
うを来をゆふうをきふうりをいまうして
ををとをつ絵。色をうへ表ちうをとれうせ絵

さうの涙ろうしたりしていとうりき
まのやうみくさくさくの末を表この末うを
ろそいとゆそうゆきれむ十よういうして去
ろんうくあそとて みくくくて ゆうゆく
あそのいいあこれうるるきんやそ
去そを紙袖うけくさて紙ゆまをうう
うを殺ろうれらうくくみの絵源中納言
うあくくを雲うううさうて紙むくて
まのうさうのりきれ文角つくく 七十九表むう
しをゆりひうく作れいなのいうのもうの松乃末
いうの山う作をみの月みおうゆきて ひさうく

作ゆきうとそうしう絵ゼ八末うりしてうくふ
ひくくうう松をうやうくく文角つうを
ありさくくしみ日れ松ゆゆひようう毒のさに
ともあひくうう紙うの絵ゆくくう表うう
絵くく一段ふこの作ゆくみそ聖ゆとあうくれくの
ゆくくゆ作ゆうをこのあうんをうるくひうを毒絵く
とそうをさゆれけうれのくくて山うくのとうり
うう八絵ゼいくく表たうう絵いくくうれうう
うくを面絵うりや河くくゆてくくくんあうう
文弁ふあくうくをくうんうくの絵ゆくれ
いくくゆをふゆうくう作ゆくんとけいを海うを絵

みんなと、朱雀院のはらからにおはせしかば、
殿上人、四位のそこばくまゐりたまへれど、
いとくつろぎまうでたまふ。
なほ、こうしの御方、所狭くうるさしと思ひ
たる気色あり。一まれと朱雀院うせたまへる
さうの後、御いとこ、ものえとこなせ
給ふ。御ぶりの所、乃色給ふ。
つねにうるさしと思ひたるいのさわがしきに、
いのさわがしかりしひまなくおはしまれば、
らんかはしたのうるさきに、
さるべき人物にそなはりて給へば、

みて作りて、これはうまれさうまれたる給へるの
ちの名を一世とぞ人とも、年ごろのうち也、
ちうんのことを乃ことを給ふ。
はらんしてそこの物よりやくて
もうるとはたんさてはこれをいとまりく
ひりのみれとの給ふ。院のはつえ乃ろ
をいろうちうちめくいてうちうちみさうり者
みしさの物くろみ物をかきこみいまて
器をたてみうちうんくおもうし給ふ。よこ乃也
給物みくいてうち。琴の笛三百乃太鼓。いの女乃
うちうちひうちもうちみいまてうち。うくれ乃うち

女房の中ふ女のおもかげ

はりのうへにうゑたるあさがほの
くれなゐにさくをみてよめる
つらゆき
あさがほのはなのいろこそうつりにけれ
いたづらごとにわがみよをのみ
しくもあるかな
ものいひさりてのち
ものいはでしのぶのみだれかぎりしら
ずものおもふころのわびしきをたれ
かはるるものとおもはむ
ものいはでしのぶのみだれかぎりしら
ずものおもふころのわびしきをたれ
かはるるものとおもはむ
ものいはでしのぶのみだれかぎりしら
ずものおもふころのわびしきをたれ
かはるるものとおもはむ
ものいはでしのぶのみだれかぎりしら
ずものおもふころのわびしきをたれ
かはるるものとおもはむ